特242
248

弘法大師と其後の時代

澄惣五郎述

始

特242
248

弘法大師と其後の時代

魚澄惣五郎述

昭和十二年六月
校友會

此のたび弘法大師降誕會の記念講演會に私一場のお話を致します機會を得ましたことは、非常に光榮と致します所でございます。

曩に明治四十年の六月の十五日でありますが、今日此處にお出でになつて居られます谷本博士が、四時間に亘る大講演をなされましてから後、今日の降誕會に至るまで講演會について色々なことを伺つて居りますると、碩學大家が有ゆる角度から、非常に微に入り細に亘つて、弘法大師に關する御講演がございまして、最早私が今夕お話を申上げる餘地もない程でございますけれども、富士の山も見方によれば、所謂富士の百景で

ありまして、又變つた見方ともなるのでありまして、弘法大師の如き偉大なる人格に就きましては、色々な見方があるだらうと考へまして、聊かこの席を借りまして、卑見を申上げてみたいと存じます。

「佛法東に傳つてこのかた、僧史の載する所、未だ是の如き人あらず」といふとは、弘法大師御廣傳にも載つて居りまする通りでありまして、弘法大師の學問信仰といふやうな方面は申すまでもなく、又文藝の上に於きましても、其の詩の如きは、御承知の如く「遍照發揮性靈集」を初と致しまして、立派な詩がずつと今日まで傳へられて居りますし又入木道等に於きましても、所謂書道の元祖として崇められて居ることは、申すまでもありませぬです。其の他繪畫に於ても、彫刻に於ても、或は建築等に於きましても、大師の往く所可ならざるはなしといふ風に傳へられて居りまして、或は東寺の建立、高野山の建立、或は室生寺の建立、殊に室生寺五重塔婆の如き、弘法大師の一夜造の塔といふ風に傳へられて居る位であります。又弘法大師は、或は石油、石炭の使用法、或は溫泉の發見とか、或は菓子製造法とか、茶の栽培とか、大師染といふ染料の發明とか、お醫者さんであるとか、土木事業であるとか、度量衡を作られたとか、砂糖の製法を始められたとか、色々のことが今日傳へられて居ります。また弘法大師行狀記や、行狀要集を見ると、高野山御影堂の祖師畫像は、祖師が入定前に諸弟子達へ遺告された時、眞如法親王が、次の間で描かれたものに、祖師が自ら目を入れられた等の、有難い傳說さへ殘つて居ります。

是等の傳承が明治以後になりまして、學問が段々理智的になつて參りまして、大師の宗教に關する學問であるとか、或は弘法大師の御信仰といふ風な方面は別と致しまして繪畫・彫刻・建築等其の他のことに就きましては、色々批判を加へる者が出て參りまして御承知の如く、明治四十三年の國民新聞に、平子鐸嶺といふ方が「空海は繪をゑがゝず像を刻まざるの辨」といふ論文を發表せられました。大師の書道に關しましては、文獻記錄等の確かなものが存してゐるけれども、繪畫彫刻等には、大師の技倆を想像する確

かな史料が全くなく、想像する餘地がないといふことを論じました。其の後是等に關する議論は、色々と論ぜられて、最近まで屢々蒸返されてゐる狀態であります。私は今大師が彫刻をされたか、繪をかゝれたかといふことを論ずるのではありませぬですが、又「いろは歌」の如きに至りましても、弘法大師が漢字の略體や、或は草體の妙處を併しまして、涅槃經の四句の偈を、所謂我が國語に寫しまして、一種の歌にされたといふことが、傳へられて居りまして、斯ういふ風な弘法大師に關する傳承が、略々いつ頃から盛んに傳へられるやうになつて來たか、といふことを考へてみたいのであります。

斯かる話は、勿論學問とか、書道とかいふやうな風な方面は別と致しまして、其の他の色々な往く處可ならざるはなき色んな他方面の大師の御才能と申しますものは、主として鎌倉時代以後になつて傳唱せられて來るのであります。で丁度室町時代の初頃、後小松天皇の康應元年の書寫にかゝる名古屋眞福寺寶生院に所藏せられて居る璃玉集といふものに、弘法大師を假名といろは歌の作者なりと致して居りますですが、又同じ頃の

著作である所の釋日本紀に於きましても、いろは歌をば弘法大師の作と傳へて居ります又同じ鎌倉時代の終頃の頓阿法師の高野日記と申しますものを見ますと、やはりいろは歌が、弘法大師のお作であるといふ風なことを傳へて居ります。それには昔大師が高野山を營む時、大工共が文字を知らないので、木割する時にも符牒が付けられない。そこで大師はいろは歌をつくつて、木の口を合はしたと書いてあります。一體大師の開かれた眞言宗の信仰と申しますものは、弘法大師が入定せられてから後、段々と弘まつては參りましたけれども、大師個人の卽ち弘法大師の御人格に對する個人の信仰、個人を憧憬れるといふ風な傾向は、直ぐには出てゐないのであります。それが主として盛んになつて參りましたのは、鎌倉時代以後で、大體此の宗祖を非常に崇める崇敬する、信仰するといふやうなことが非常に行はれますのは、多くは鎌倉時代以後が主でありますですが、やはり眞言宗に於きましても、大師の個人の御人格を崇める、又非常に之を崇敬するといふ風な傾向が强くなつて參りまするのは、大體鎌倉時代以後といふことが考へら

れます。現在殘つて居りまする弘法大師に關する色んな傳記を傳ふる所の史料、例へば繪傳と致しましては、東寺所藏の十二卷本の弘法大師行狀記、高野山地藏院に所藏して居られまする六卷本の高野大師行狀圖畫、是等のものは悉く皆鎌倉末乃至足利初期に屬する作品であります。又弘法大師の傳記の主なるものは、古い古寫本の存して居りますものからみますと、名古屋の眞福寺寶生院の所藏にかゝります所の弘法大師傳、是は鎌倉時代の初期の書寫にかゝりますですが、續いて同じ弘法大師傳、やはり名古屋の寶生院所藏のものは、是は貞和三年の筆寫で、室町時代の初であり、又弘法大師御入定勘決記といふのも、やはり室町時代の初或は鎌倉時代の終といふまでの時期に當つて居ります。

畫像の上から見ますると、弘法大師の畫像と致しまして、最も優れた最も古いものは先づ平安時代の末に當るのであります。御承知の如く、大師が淸凉殿に於きまして、奈良の僧侶と宗論をなさいました時に、大師が智拳の印を結ばれて、忽ち大日如來のお姿

になられたといふ傳がありますが、それをゑがきました所の八宗論大日如來像といふのが、高野山善集院にあります。是もやはり平安時代末期の作品になつて居ります。又只今東京帝室博物館の所藏になつて居りまする眞言八祖像の弘法大師のお姿は、正和三年の作で、鎌倉時代の末の作品であります。又團男爵家の所藏して居られます所の極めて優秀なるものがありまするが、この弘法大師畫像、是もやはり鎌倉時代に屬しますし、又後宇多上皇の御宸筆の御讃があると言はれて居ります所の、弘法大師の御像の如きもやはり勿論當時の鎌倉時代の時期に屬するのであります。

又藤原時代の末頃、卽ち平安時代の末頃から段々と大師の畫像に變つたものが出來て居ります。稚兒大師の像、是は只今現物と致しましては、大阪朝日新聞社の村山長擧氏の御所藏になつて居りまして、藤原信實の筆と傳へられますものであります。是が先づ平安時代末のものであります。それから段々稚兒大師像、所謂誕生佛と申しますが、大師の合掌した立像であります。是が大體鎌倉時代後に出來て參りまして、此の根據は申

すまでもないことでありますが、聖德太子のお像から出て來て居りますのであります。隨つて斯ういふ稚兒大師の像、弘法大師の斯ういふ姿のお像が出來て參りますと同時に弘法大師が聖德太子の後身である。聖德太子が再び現はれられたものである。斯ういふ風な考へ方が、此の稚兒大師の像と關聯して現はれて參りまして、「聖德弘法一體抄」とて、聖德太子と弘法大師とが一體のものであるといふことを述べた書物が出て參ります。弘法大師が聖德太子の再生であるといふ風な見方考へ方が出來て參りますと同時に法隆寺に弘法大師像がまつられて來るのであります。只今大和法隆寺には、五尊像と申します畫像がありますが、是は大日如來を中心に如意輪觀音、虛空藏菩薩、而して聖德太子と弘法大師をゐがいた所のものであります。此の時分になりますると、法隆寺も眞言宗の餘程感化を受けて來て居ります。又聖德太子を信仰し、聖德太子を尊崇致します念は、同時に其の再生である所の、弘法大師を崇め奉るといふ風になつて參りますのですが、同時に室町時代の初期である應安八年の紀年の記された胎內銘文がある所の、

弘法大師木彫の坐像が法隆寺に只今安置せられるやうになつて居りますのも、此の關係からであらうと思はれるのであります。

其の後室町時代以後からは、大師信仰といふものは次第に展開して參りました。また分布區域も廣くなつて參りますですが、色んな意味の畫像があらはれて參ります。或は鯖大師と申しまして、鯖を弘法大師がさげてゐられるものや、或は瞬目大師、廿日大師爪彫大師、種蒔大師、厄除大師、鎖大師、見返大師、等といふ風な色んな名前で樣々のお姿の弘法大師があらはれて來るやうになつて參りました。是には必ずや、私は天神信仰との關係があると思ひます。菅原道眞をお祀りして、其の信仰が次第に發展して參りますのが、同じ室町時代であるのですが、室町時代になりますると、天神樣の姿も色々變つて參りまして、牛天神であるとか、或は芭蕉天神であるとか、飛梅天神であるとか渡唐天神であるとか樣々の姿になつて現はれて來るのであります。所がまた弘法大師が聖德太子の再現である再生であるといふ風に傳へられる一方に、又行基菩薩が想出され

て來たのであります。續群書類從にございますする弘法大師行化記といふものを見まする
と、弘法大師が十九歳の時に、播磨の方を旅行されました所が、そこへ或る老人のお婆
さんが出て參りまして、さうして此の弘法大師にお供養をした、其のお婆さんが言ふの
には、自分の夫は行基の弟子であつて、それが出家しない時の自分は妻である。それが
「自分が亡くなつてから後何年何月經てば菩薩が自分の家へ來て宿るであらう」といふこ
とを言つた。果して待つて居るのに丁度今あなたに當ると言つて、弘法大師が見えたの
を行基菩薩が再來されたものである。斯ういふ風に考へて居つたといふことが、記され
て居ります。是も弘法大師の色々な所の感化力といふものゝ偉大さが、行基といふもの
を想出させ、行基菩薩卽弘法大師といふ思想に變つて來たのであります。信仰の範圍が
非常に擴大されて來たといふことを、物語つてゐるものであらうと存ずるのであります

二

更に私共が深く感激致します所は、弘法大師御信仰に就きまして、平安時代に於きま
しては、宇多、醍醐兩天皇、ついで宇多天皇並に醍醐天皇の御名を繼がれました所の後
宇多天皇並に後醍醐天皇の此の兩天皇が、大師に篤き信仰を寄せられた點であります。
宇多天皇につきましては、只今特に申すまでもないことでありますけれども、益信僧正
を戒師とされまして、出家遊ばされたのでありますが、特に大師を御信仰になりまして
弘法大師に諡號を賜りたいといふことを、宇多法皇が親ら醍醐天皇に上表を奉られた。
此の時には醍醐天皇から大師號の勅許がございませぬでしたけれども、其の後東寺の長
者觀賢僧正から、數回上表がございましたので、遂に勅許されたことは、御承知の通り
であります。其の時の醍醐天皇の延曆二十一年十月二十七日の勅書には、「況んや太上
法皇既に其の道を味ひ、其の人を追憶し給ふをや」、況んや太上法皇卽ち宇多天皇が其
の道卽ち佛の道を味ひ其の人を追憶し給ふをや、其の人と申しますのは弘法大師であり
ます。弘法大師を追憶されるのであるからといふので、弘法大師の諡號を勅許あらせら
れるといふことになつたといふことは、御承知の通りであります。のみならず、昌泰三

年には、至尊の御身にましまして、宇多法皇は高野山に御登山になつたのであります。それは御承知の如く、神皇正統記に於きましても、「弘法大師四代の弟子益信僧正を御師にて、東寺にて灌頂せさせ給ふ……弘法の流を宗とせさせ給ひければ其の御流とて今に絶えず仁和寺に傳へ侍るは是也」といふことを記してあるのであります。次の醍醐天皇も、亦大師を御信仰になられたといふことは、申すまでもないことでありますが、殊に後程申したいと思つて居りますが、東寺の三十帖策子を、是は只今は御室の仁和寺に大切に保存されて居りますけれども、之を高野山から東寺の方へ移されることは、醍醐天皇がお盡しになつて居るのであります。一體此の宇多法皇の御代、即ち寛平の治、醍醐天皇、村上天皇の御代は、延喜・天暦の御代と申しまして、寛平・延喜・天暦の御代は非常に世の中が治まつた時代であるかの如く申しまして、其の御治世を後世稱へて居りますけれども、實際の情勢は、決してさうではありませぬ。御承知の延喜十四年の三善清行の意見封事十二條を見ましても、又當時の記錄であります所の古今著聞集等を見ま

しても、如何に政治が紊れて居るか、殊に地方の政治が紊れて來て居るかゞ明かに分ります。之をしも延喜・天暦の御代とか、或は寛平の御代とか云つて、之を聖代であると稱へますのは、是はどういふ譯かと申しますと、全く其の時代の政治が立派であつて、よく治つたと申しますよりも、宇多天皇並に醍醐天皇の御聖德の高いこと、それを指して居るのであります。其の點に於きましては、後宇多天皇・後醍醐天皇の御代に於かれましても、同じ關係でありまして、當時は北條氏即ち鎌倉時代の末期に當りまして、かなり世の中が騷がしい時であります。此の宇多天皇や或は醍醐天皇の御治世を稱へられるといふことが、全く此の大師御信仰といふことにも餘程深い關係がある。其のお德の高いといふことを稱へられたといふこと、即ち延喜・天暦の治といふものは、やはり弘法大師の一つの教の力といふものが、餘程此の時にあらはれて來て居るものと考へてもよからうかと思ふのであります。宇多法皇の御日記には、「朕誠に愚なりといへども、法に非ずんば行はず、道に非んば言はず」とさへ仰せられてゐます。

宇多天皇並に醍醐天皇を最もお慕ひになられたのが、鎌倉時代の末建武中興の時にお出ましになりました所の、後宇多天皇並に後醍醐天皇であるといふことは申すまでもないことであります。後宇多天皇が御出家なさいまする前年、即ち德治元年といふ年でありますが、後宇多天皇は眞言七祖畫像を修復するために、それを召されて居ります。後宇多天皇は殊に大師の尊崇に容易ならぬものがありますですが、正和四年の三月二十一日には、天皇親ら弘法大師傳に、御宸筆を染めさせられて居ります。其のお書風さへ弘法大師の書風に似通つてゐられる。一天萬乘の至尊が、親ら宸筆をものされて、宗祖の傳を作られるといふ風なことは、古今絶無のことでありまして、之によつても、後宇多法皇の弘法大師の御信仰の篤いことが解るのでありますが、全く是も、先の宇多天皇の後をお慕ひになつた譯であります。又後宇多法皇は、大師が支那から持つて歸られた所の、請來品であるとか、其の他弘法大師の遺品に就きましては、極めて敬虔な態度をお執りになりまして、殊に神護寺兩界曼荼羅記によりますると、延慶元年の三月には

神護寺に御登山遊ばされまして、大師の書かれた曼荼羅が、非常に破損して居るので、後宇多法皇が、それを修復されることゝなり、これを非常にお喜びになつたといふことが、記されてあります。後宇多法皇の如きは、弘法大師の再來であるといふ風なことさへ、當時の人々が言つたやうでありまして、後宇多法皇の御理想は、全く此の弘法大師を御理想として居られたのでありまして、又東寺の御影堂に於かれましても、東寺の興隆に就ては、願文を捧げられて居るのであります。其の後宇多法皇の御信仰は、色んな方面にも影響致しましたと見えまして、其の感化を受けまして、色んな方面にも現はれて參りますですが、先程申しました鎌倉時代に於ける弘法大師信仰の隆昌といふことは上朝廷に於かれましても、此の御尊崇といふことゝ直接、間接に色んな影響を與へて來て居るのであります。隨つて師錬の書きました元亨釋書にさへ、弘法大師の奇蹟を色々書きまして、其の德を稱へ大師の靈驗を信ずるといふことが、彌々盛んになつて來た樣子が見えるのであります。又後宇多法皇は、延慶元年の三月には、高雄の神護寺に幸せ

られました。只今高雄の神護寺にございまする弘法大師の書かれました所の、灌頂歴名之を法皇は南鳥羽の勝光明院といふ所の寶藏からお取出になりまして德治三年六月、之を神護寺にお藏めになつて居るのであります。斯の如く後宇多法皇は、いたく大師を崇敬せられまして、其の遺品、遺物を大切に保存するといふことにお盡しにもなつて居るのであります。

後宇多法皇が宇多法皇をお慕ひになつて、後宇多天皇と申上げた如くに、後醍醐天皇も亦醍醐天皇をお慕ひになりまして、後醍醐天皇と既に御生前に於きまして御名をおつけになるやうなお心持であつたやうでありますが、醍醐天皇の時代の御事業が、宇多天皇の事業を承繼がれたと同じやうに、後醍醐天皇は又後宇多天皇の御事業卽ち御父君後宇多天皇の御後を慕つて、同じ方向に向つてお進みになつたのであります。後醍醐天皇が和漢の學問に非常に優れてゐられるといふことは、只今申すまでもないことでありますが、殊に眞言宗の御信仰が厚く、傳法灌頂をお受けになつて居ることは、御承知の通

りであります。殊に後醍醐天皇が、弘法大師御信仰の一つとして、私共の非常に感激致しまするのは、弘法大師が其の弟子に與へました所の天長印信を、天皇が延元四年六月十五日吉野山に於て御書寫なさいまして、之を醍醐の文觀僧正にお與へになつたことであります。是は後醍醐天皇が崩御に先だつこと二ヶ月のことであります。是は如何にも後醍醐天皇が、大師をお慕ひになり、大師の書かれたものをお寫しになつて、さうしてそれを信任される文觀僧正にお與へになつたのであります。其の後醍醐天皇の御書も、亦非常に後宇多天皇に似て御立派でゐられる。それを戴いた文觀僧正は其の由來を書きまして、後醍醐天皇を「大師の再誕、祕藏の帝王」といふ風なことをやはり書いて居ります。後宇多法皇が弘法大師の再來であるといひ、又後醍醐天皇も大師の再誕といふ風に後宇多、後醍醐兩天皇に於かれましても特に此の大師のお德を慕はれたのであります。

で、一體只今殘つて居りまする弘法大師の眞跡として、疑ふ餘地のないものと申しますれば、東寺に所藏されて居りまする所の眞言七祖畫像の讃、風信帖をはじめ、御室の

仁和寺にあります所の三十帖策子、或は神護寺の灌頂歴名であるとか、或は醍醐寺の狸毛筆獻上表といふ風なもの、斯ういふ風な大師の眞跡として、殆ど疑ふことの出來ない立派なものが、今日數多く傳へられて居る、といふことは、是は勿論大師の立派さ、大師の非常にお德の高いといふこと、偉さといふことからも來て居りますのでありますけれども、後宇多、後醍醐天皇を初め奉りまして、歴代至尊の大師に對する御信仰の賜と云はねばならぬと思ひます。私は奈良へ參りまして、正倉院を拜觀致しまする時にいつも考へるのでありますけれども、あの正倉院が東大寺其の他奈良の寺々が屢々兵燹にかゝり火災にかゝつて燒けて居るに拘らず、正倉院が不思議に何の禍もなくして今日まで傳へられてゐるといふことは、全く我が皇室の御稜威の然らしむる所であるといふことを、深く考へて居るのでありまするが、弘法大師の千年前の此の立派な眞跡が、數多く而も疑ふことの出來ない確かなものが、今日斯く多數に傳へられて居るといふことは實に不思議と思はれて居るのでありまして、全く弘法大師の德の高いこと、同時に歴代

朝廷の御信仰の篤さが之を保護せられたといふことの賜であると思ひます。

一體此の眞言宗の寺院は、私共歴史の材料を色々取調べにあつちこつち參りますですが、大體に史料が非常に多いのであります。能く保存されて居ります。此の眞言宗の寺院が、歴史的な材料が非常に澤山保存せられて居るといふことは、一つには政治上の紛爭に餘りに積極的に入つてゐないといふことを示して居ると同時に、眞言宗の寺院は政治上の爭といふものに對しては、極めて調和的な態度を執つたのでなからうか、隨つて戰爭の禍を受けなかつたのでなからうかと思ふのであります。勿論寺院が政治上の爭の渦中に投じないといふことは、當然寺院の本來の使命でありますけれども、當時の時勢といふものは、却々さうは許さないのであります。にも拘らず政治的には非常によく活躍した方々が、眞言宗から出て居られます。例へば醍醐に致しましても賢俊僧正であるとか、或は文觀僧正に致しましても、後には滿濟であるとか、義演であるとか非常に政治的に活動された方が澤山出て居られます。けれどもそれは政活的には非常によく働か

れて、而も非常に調和的な態度を以て當られたが爲に、其の戰爭の災を受けることが少かつたのでなからうかと思ひます。東寺に於きましても、御承知の如く百合文書と申します百箱に餘る古文書、今日完全に保存されて居るといふことは、實に有難いことでありますですが、日本の寺院に於ける古文書の一番所藏されて居るものと致しましては、此の東寺の古文書が最も出色なものであります。其の他醍醐の三寶院に於きましても、やはり日本に於ての屈指の多くの史料を保存せられて居る寺であります。又高野山に於きましても、色んな寺院は隨分燒かれたりなんかしたに拘らず、幸ひに寶物殊に寶簡集といふ浩瀚なる古文書が、今日保存せられて居るといふこと、信長、秀吉が宗教に對しまして、殊に寺院に對しましては可なり手荒いやり方をやつて居るにも拘らず、高野山に於きましても、此の寶物が完全に今日まで保存されて居るといふこと、是等は皆眞言宗の一つのやり方、眞言宗の方々の態度といふものが然らしめたのでなからうかと思ひます。それは全く大師のやはり一つの方針、弘法大師の態度のあらはれ、卽ち大師が總てに對して、非常に調和的態度をお執りになつた。隨つて寺院が非常に斯ういふ風な時に災を受けることが少かつた。殊に高野山の如きは、薩摩の島津義弘が建てました所の豐臣秀吉朝鮮征伐の時の敵味方戰死者の碑があるといふやうなこと、斯ういふ風なことは、如何にもよく眞言宗の宗旨の趣旨をよく示したものでなからうかと思ふのであります。で、弘法大師の鎌倉時代以後、所謂武家政治の時代に入りまして、鎌倉、室町時代に於きましても、眞言宗諸寺院の態度といふものが偏しないで、極めて調和的な態度を執り、又それらから出られた所の多くの僧侶が、皆政治的には活躍されたものゝ、それが極めて巧妙に其の間に處されたといふことが、今日色んな眞言宗寺院の寶物の多いといふことであります。それはやはり先程申しましたやうに、弘法大師の書かれた立派な眞跡が、今日までも多く傳へられて居るといふことゝ、同じ原因から來たものでなからうかと思ふのであります。私の申上げますことは大體是で終りと致します

（終り）

375
714

昭和十二年八月一日印刷
昭和十二年八月五日發行

著者　魚澄惣五郎　京都市下京區猪熊通八條上ル

發行者　若田等海　京都市下京區猪熊通八條上ル

印刷所　六大新報社印刷部　京都市下京區猪熊通八條上ル

不許複製

發行所　京都市猪熊通八條上ル　六大新報社　振替京都二九四五番　電話下三八一六番

終